



歯医者さんが教える 歯と口腔の健康管理

〔第44回〕 歯科の麻酔について

監修／歯学博士 鹿島 健司

麻酔と言えば18世紀に華岡青洲が世界初の全身麻酔手術に成功し、乳がん、舌がん、脱腸、痔、尿路結石等の治療を行ったことは、米国の医学者らによって吸入麻酔が発見される40年も前のことでした。彼が調合・作製した通仙散という麻酔薬は、その毒性と効果の不安定さから、その後広く臨床応用されることは無かったのですが、彼の業績は現在でも国際的に高く評価されています。19世紀になって、笑気やエーテル等が抜歯の際に用いられるようになったのが、現在用いられている麻酔の第一歩ということになります。すなわち、麻酔の歴史は歯科医によってスタートしたのです。



写真1 麻酔がない時代の抜歯風景

現代医学は麻酔と消毒・滅菌レベルの向上によって発展を遂げることができたと言われて

いますが、確かに、歯を抜かれ

る・削られる時の痛みは凄まじいもので、麻酔が無い時代には縛り付けたり抑え込んだり、殴って気絶させてから抜歯をしたという笑えない逸話も残っています（写真1）。



写真2 局所麻酔注射

歯科治療では多くのケースで局所麻酔の注射が行われます（写真2）。「歯科の麻酔」と聞くと皆さんは歯茎にブスッと注射されるアレを思い浮かべるかと思います。痛みが出ないようにするために、ちょっと痛い麻酔注射を行なうのですが、確かに少し怖いですね。昨今では麻酔薬の浸透性もアップし、細くて切れの良い針が応用され、さらには注射針の刺入時の痛みを軽減するために表面麻酔のスプレーやシールを貼付することによって、アレの痛みを感じ

監修／鹿島健司（歯学博士）。1958年1月生まれ。かしま歯科医院院長
日本大学歯学部・松戸歯学部兼任講師、川口歯科医師会理事（学術部長）



写真3 表面麻酔のスプレーやシール



写真4 シールの貼付

ないような工夫も行われています（写真3、写真4）。また、電動注射器を用いて、より細い針で均一な圧でゆっくりと注入することも有効です（写真5）。



写真5 電動の注射器

通常は3分～10分、麻酔が十分に効いてくるのを待ってから治療になりますが、炎症が強い部分や骨が厚い部位などでは麻酔が効きにくいこともあります。そのような際には遠慮なく歯科医に告げるようにしてください。麻酔液を追加したり、太い神経の近くに注射する効果の高い伝達麻酔が行われます。

麻酔後は口が痺れる煩わしさがあり、誤って頬の粘膜や唇を噛んでしまったり、やけどをしてしまったりすることもあるので、1時間～3時間は食事を控える方がよろしいかと思います。麻酔の部位や注入量、体調によって異なりますが、上顎に比べ下顎の方が麻酔効果が長く持続しますので注意してください。特に小児では下唇を強く噛んでしまったり腫れることもありますので、保護者の方の十分な観察が必要となります。

口の中は細菌の多い場所です。麻酔注射の刺入部に細菌が付くと口内炎になることがあります。痛みが強い場合は、口内炎の治療薬（アフタッチ、ケナログ等）を塗布することで比較的早期に治癒しますので、担当医に相談してください。